



エッセイ

# ガンジーの箴言

しんげん

松村 眞

発行日

2006.8.17

私がときどき行く横浜市郊外のフォーラムは、よく手入れされた前庭がきれいで気持ちがよい。建物は1階が図書室と音楽ホール、2階は市民団体やサークルが使う生活工房、3階はフィットネスルームと会議室になっている。図書室にはビデオ視聴コーナーがあり、映画やドキュメンタリーが見られる。ここを訪れたとき、ビデオライブラリーに映画「ガンジー」の上下2編があるのを見つけたので一気に見た。マハトマ・ガンジーはイギリスで法律を学び、南アフリカで弁護士を開業する。だが、インド人というだけで乗っていた一等車から締め出され、抗議したら降ろされてしまう。インド人への不当な差別に怒ったガンジーは公衆の面前で、仲間とともにインド移民にだけ携帯を義務付けられていた身分証を焼き捨てて差別の不当性を訴える。そして警官の暴力的な弾圧に会うのだが、法廷に警官の暴力行為を訴えて大きな反響を呼ぶ。やがてボンベイに戻ったガンジーは、非暴力・不服従を基本方針に、当時のインドを支配していたイギリスに対して抵抗運動を始める。植民地支配への抵抗を説く若いガンジーの演説は説得力がある。「抵抗すれば弾圧されるだろう。殴られ、投獄され、殺されるかもしれない。だが暴力で対抗してはならない。抵抗せずに殴られることで彼らの良心に訴えるのだ。不当な差別に決して服従してはならない。支配者は弾圧の犠牲となったインド人の遺体を手に入れられても、服従は決して手に入れられないのだ」と。

この映画を見ていて、私はインド訪問の記憶とガンジーの箴言を思い出していた。もう何年も前になるが、デリーの空港に降り立ったときの印象は強烈だった。ゲートの出口には乗り物までの荷物運びの仕事を取ろうと、ものすごい人数が待ち受けひしめきあっていた。重なり合った黒い顔に目と歯ばかりが目立ち、十数本の手がスーツケースに伸びてくる。うっかり手を離したらどこに持っていかれるかわからないから、大きな声で「No thank you!」とわめきながら、必死にガイドの後を追ってスーツケースを車まで運んだ。次の日の朝、車からデリーの街を見たときの印象も忘れない。目につくのはいたるところにいる大きな牛で、道路の両脇に立ったり座ったりしている。なぜか車道の中央分離帯に立っているのが多く、ガイドの話では排気ガスの臭いが好きなのだという。本当のところは牛に聞いてみないとわからないが、中央分離帯は蚊や虻が少ないからではないだろうか。牛が多いだけあって、いたるところで牛糞を干している。燃料に使うためだが、干し方は天日で干物を作る要領に似ている。木枠に板を張った台を斜めに立てかけ、丸めた牛糞をわらじぐらいの大きさに伸ばしてペタペタと張ってゆく。日本ではごみを燃料にするために機械で裁断し、さらに電力を使って成型しているが、ここでは牛が裁断機を、そして人間が成形機の役割を果たしている。

できた燃料はすぐそばの、これまたおびただしい数の屋台がナンを焼くのに使っている。石の上で焼かれたナンは家がない人たちや、家があってもキッチンがない人の安価な朝食になっている。値段は1枚が数円程度だったと思う。街の中心から少し離れた場所では、人々が地面の上に毛布を敷いて寝ていた。1ヶ所に数十人も並んで寝ている場所もあり、見慣れないわれわれの目には異様な風景に映った。ホームレスという意味では日本でも珍しくはないのだが、段ボールの小屋に住む日本のホームレスとは全く違って見える。デリーの路上生活者から見れば雨にぬれない小屋があり、コンロやテレビまで持っている日本のホームレスは同じ仲間に見える。デリーでは貧しい人々に比べて、牛の方がよほど恵まれているように見える。どの牛も丸々と太っていて色艶がよい。多くが飼い主のいない迷い牛だが、人々がせっせと草を集めて与えている。牛は決して屠殺されて食べられることはなく、ほとんど働かされることもない。だから朝から晩までのんびりと草を食み寝そべっている。ここでは牛が人間らしい暮らしをしていると思ったが、よく考えると人間の方が牛に近い暮らしをしている気がした。

デリーには1500年代に栄えたムガル帝国のフマユーン廟や、1200年代に建てられたクトゥブ・ミナールの塔（勝利の塔）がある。この塔は赤砂岩でできた古い砦の監視塔で、下部の直径が約15メートル、高さは72メートルもある。遠くから見る外観は、5段の段飾りがある巨大な柱のように見える。周囲には細かい彫刻のある柱が並んでおり、貴重な建造物として世界遺産に指定されている。政治的な記念碑としては高さ42メートルのインド門が有名で、第1次大戦で英国のために戦った9万人の兵士が祀られている。有名な観光スポットはラージガートと呼ばれる広い公園で、マハトマ・ガンジーの独立運動を記念して作られた。ガンジーはこの公園の一隅で荼毘に付され、遺灰はヤムナー川とガンジス川に撒かれた。だから正確には墓でも廟でもないが、多くの人々がガンジーの偉業を讃えて訪れている。黒い大理石でできた慰霊碑の台座には、ガンジーが1925年に「ヤング・インディア」という機関紙に載せた「七つの箴言」が刻まれている。この箴言は80年も前に書かれたものだが、その一つ一つは今の時代にも通ずる普遍的なメッセージだと思う。私は現地でこの箴言を読んだとき、簡潔な表現で重要な理念を伝えるメッセージに感動して暗記してしまった。知っている人も多いだろうが、ここで一般的な日本語訳とオリジナルの英原文を紹介し、今の日本にも通用することを確かめてみたい。

#### 七つの箴言（正確には七つの社会的な罪：Seven Social Sins）

- |           |   |                             |
|-----------|---|-----------------------------|
| ① 原理なき政治  | : | Politics without Principles |
| ② 道徳なき商業  | : | Commerce without Morality   |
| ③ 人格なき教育  | : | Knowledge without Character |
| ④ 人間性なき科学 | : | Science without Humanity    |

- ⑤ 労働なき富 : Wealth without Work
- ⑥ 良心なき快樂 : Pleasure without Conscience
- ⑦ 献身なき宗教 : Worship without Sacrifice

原理なき政治というのは、幸いにも過去数年の日本は該当しないだろう。「小さな政府」、「官から民へ」、「中央から地方へ」といったキャッチフレーズは、中央集権と不公平な既得権社会を変革しようとする理念だった。実効性に疑問が残るにしても、明確で有意義な原理だったのではないだろうか。道徳なき商業はどうであろう。発展した国際市場は、企業に収益性だけでなく強い倫理観も求め、多くの日本企業がその期待に応えて活躍している。一方、いつまで経っても談合と決別できない倫理感の乏しい業界や企業もある。付加価値を生まずに株価だけを人為的に操作し、巨利を得ようとする企業も倫理なき商業であろう。だが自分がそのような企業の社員や経営者だとしたら、倫理的に問題があっても安易に利益を得られる誘惑に勝てるかどうか自信がない。心に刻み込んでおくべき戒めであろう。人格なき教育では瑣末な学則で生徒の行動を縛り、独立した人格を認めようとしないうちがまだ少なくない。服装や髪型などは自己表現の一種だから、本人の自由な選択に委ねるべきである。私的な選択の自由まで規制する校則は、全面的に廃止するのが望ましい。欧米諸国の公立学校には制服もなければ、化粧もアクセサリも自由である。幸いなことに校則を最小限度に緩和する学校が増えているが、まだ規則を守らせ管理することが重要な教育と考えている教師もいる。教育界でときおり見られる全体主義や連帯責任にも疑問を感じる。

人格なき教育のメッセージは、英語の原表現から考えると品格のともなわぬ学識と解釈の方が正しいかもしれない。当時のインドでは、高等教育を受けた限られた少数の人たちが指導的な地位と富を得ていたから、その知識を私利私欲のために使うことを戒めたのであろう。人間性なき科学を否定する趣旨は明確であろう。科学的な真理の追究や原理の発見は、好奇心の満足や学問のためではなく、人間のためという原点を忘れるなというメッセージである。労働なき富はどうであろうか。当時のインドでは一部の資本家が巨利を得、自分たちは働かずに贅沢に暮らして大衆の反感を買っていた。だからこのメッセージは、「働せずして利を得るのは罪悪」という戒めである。日本では「働かざる者食うべからず」の教えに当たるだろう。良心なき快樂は、カラ出張で作った裏金での宴会が代表例である。献身なき宗教は、信仰を口にしながら他人のために働かず、社会に寄与しない一部の新興宗教にその姿を見る気がする。ところで、このような戒めを意識しなくても、われわれはいつも何らかの規範で自分の行動を律している。しかし日常生活に埋没すると、いつしかその規範を忘れ安易に流れる傾向があると思う。ガンジーの箴言は、その一つ一つが今の時代を生きる個人にも、企業にも、国家にも普遍的に求められる規範ではないだろうか。

(おわり)